

論文番号 18

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名 (原題/訳)

Alcohol consumption and risk of dementia: the Rotterdam Study.

アルコール摂取と痴呆のリスク：ロッテルダム研究

執筆者

Ruitenbergh A, Swieten JC, Whitteman JCM, et al

掲載誌 (番号又は発行年月日)

Lancet 2002; 359: 281-286

キーワード

alcohol, dementia, ApoE, type of alcoholic beverage

要旨

背景

軽度から中等量の飲酒は虚血性心疾患や脳卒中の危険性を減少させる。これらの血管性の病気は認知能力や痴呆と関連するので、アルコール摂取もまた痴呆のリスクに影響を与えている可能性があるという仮説を設定した。

方法

55歳以上の地域住民 7,983 人を追跡しているコホート研究、ロッテルダム研究の参加者で、飲酒量と痴呆の関連を検討した。ベースライン調査 (1990-1993) 時に痴呆を有さず、かつアルコール摂取量を調査でき欠損値のない全対象者 (5,395 人) を調査した。1993 年から 1994 年、1997 年から 1999 年の追跡検査と、広範囲に設定した登録システムにより、1999 年の終わりまでに 99.7% のほぼ完全な追跡率を達成した。統計学的手法として、年齢、性、収縮期血圧値、学歴、喫煙、BMI (肥満指数) を Cox の比例ハザードモデルで調整して、痴呆の発症確率を、非飲酒者と常用飲酒者の間で比較した。

結果

平均追跡期間は 6 年であり、この間に 197 人の痴呆が発症した。このうち 146 人はアルツハイマー病、29 人は血管性痴呆、22 人はその他のタイプの痴呆であった。アルコール摂取量の間値は 0.29 drinks であった。軽度から中等量 (毎日 1~3 drinks) は、すべてのタイプを合計した痴呆の発症と有意な負の関連を示した (相対危険度; 0.58, 95%信頼区間 0.38-0.90)。また血管性痴呆とも有意な負の関連を示したが (相対危険度; 0.29, 95% C.I. 0.09-0.93)、アルツハイマー病とは有意差を示さなかった (0.72, 95% C.I. 0.43-1.20)。痴呆と飲酒量の関連は、アルコール飲料の種類 (ワイン、ビール、リキュール、fortified ワイン) によって差異を認めなかった。有意差はないが、毎日 1~3 drinks の飲酒は、アポ E4 のアリルを持っていても持っていないなくても痴呆の低い発症リスクと関連しており、E4 アリルを持っている場合、アルツハイマー病ではより少ない量 (週 1 drink 以上、1 日 1 drink 未満) で予防効果を示しているように思われた。

考察と結論

これらの結果は、軽度から中等量のアルコール摂取が 55 歳以上の痴呆の発症リスクの低下と関連があることを示している。この効果はアルコール飲料の種類によって影響されなかった。